

『近世生活絵引』作成に向けての試み

—土屋又三郎『農業図絵』を題材にして—

田島 佳也

はじめに

日本常民文化研究所は、過去に『絵巻物による日本常民生活絵引』を編纂・発行した。その経緯と成果、意義・特色に関しては、神奈川県大学 COE の拠点リーダー福田アジオ教授の報告に明らかである。福田教授からも紹介されたように、『絵巻物による日本常民生活絵引』は対象とする時代が中世までにとどまっており、神奈川県大学 COE ではその近世編、近代編の成果を期すべく研究を進めている。だが、多くの難点が存在し、絵引研究作業も順調に進んでいるわけではない。

本報告では数々の難点を列挙・紹介するわけにはいかないが、地域によっては差別の問題もあり、ただだ闇雲に絵引編纂作業を進めればよいというわけではないからである。とにかく試行錯誤ながら試作本を製作し、専門家の閲覧・批判を仰ぎ、完成本を世に問うべく『日本近世生活絵引』の編纂に努めている。ただ、ここでは、土屋又三郎『農業図絵』に紹介されている金沢城下近辺の図絵を題材に、対象は狭くなるものの、あえて澁澤敬三がこだわった常民に焦点をあて、『近世生活絵引』作成作業の一端を披瀝・紹介し、大方のご批評を仰ぎたい。

1 『農業図絵』の『近世生活絵引』化にあたって

『農業図絵』（『日本農書全集』26 巻所収 農山漁村文化協会 1983 年）は元禄・享保期（1688～1735 年）の加賀の農業を描いた農書であり、享保 2 年（1717）に著された。これは従来、『加賀農耕風俗図絵』とも呼ばれてきた。

確定的ではないが、著者は寛文 4 年（1664）、20 歳の時に父の跡を継いで、加賀の石川郡御供田村の無組御扶持人十村役（他藩の大庄屋にあたる。藩命により扶持百姓が十ヶ村以上の村を取り仕切る肝煎に任命されて徴税や民政、生産指導に当たった。無組御扶持人十村役は扶持を支給される、郡内の十村首座で最高位）を担った土屋又三郎といわれている。正保 4 年（1644）生まれの土屋家 3 代目である。ただ、理由は定かでないが、元禄 6 年（1693）、改作奉行園田佐十郎の罪に連座し、佐十郎は流刑に、又三郎は禁獄 1 年の刑を受け、かつ平百姓に格下げされた。そして、『農業図絵』執筆 2 年後の享保 4 年（1719）に 75 歳で死去している。

今回のシンポジウムにあたり、この『農業図絵』を題材に取り上げることになったが、実は他班のメンバーからその選定に反対が出された。その拠ってたつおもな理由は『農業図絵』とは文字説明のある絵画資料であり、文字の助けを借りて絵画資料を基本的に読めること、COE としては文字説明の無い屏風絵や絵馬、絵巻物などを取り上げるべきで、「安易に過ぎる」ということであつた。とはいえ、今回『絵引』の試作に当たって、安易に選定したわけではなく、紆余曲折の議論のすえ、『農業図絵』を題材に発表することにいたつたのである。

その理由の第一は確かに、清水氏の解説のある部分もあり、導きの糸になることは否定しない。清水氏に多大なる感謝を感じているが、解説はすべての事柄にわたっているわけではない。それに『絵引』作成にあ

たって図絵のどこを切り取り、どう読み解くかは解説とは全く違う作業である。とくに清水氏の解説は四季の農業のあり方が中心で、百姓の衣服や余暇の情景、図絵に描かれている武士や行商人たちの説明はほとんどない。『絵引』の作成にあたってはそうした点まで注意を払って作業を進めており、「安易に過ぎる」という批判は当たらないと判断した。

第二は、『農業図絵』の類本ともいえるべき『耕稼春秋』八、九、十が本学、神奈川大学日本常民文化研究所に所蔵されているからである（『常民研本』）。類本は愛知県西尾市立図書館にもある。肥料商岩瀬弥助の寄贈になる『耕稼春秋』巻、式である（『岩瀬本』）。この『耕稼春秋』を比較検討されてきた堀尾尚志氏（『耕稼春秋』解題（2）『日本農書全集』第4巻 農山漁村文化協会 1980年）や、年代不詳の『農業図絵』の年代確定や内容について長年、考証をかさねて来られた清水隆久氏の研究（『農業図絵』解題と解題補記 『日本農書全集』第26巻 農山漁村文化協会 2005年）によると、細部にいたるまで本文の字体も『岩瀬本』と『常民研本』は酷似し、同一人物による筆写の可能性が高く、図絵の省略も多いという。実際、『常民研本』には多くの図絵の省略があり、彩色も単調である。これらを総合的に勘案・検討した結果、『常民研本』は『絵引』作成資料としては適さないと判断しうるにいたった。『岩瀬本』もその点では『常民研本』と同様である。

しかし、本学の『常民研本』の存在も何かの縁と考え、『農業図絵』から『絵引』作成を試みることにした。そこで図絵を精緻に描いた『桜井本』（石川県鶴来町桜井慶二郎氏蔵）の『農業図絵』を底本とすることにした。実際は、試作の段階でもあることから、『日本農書全集』第26巻（農山漁村文化協会 2005年）所収の『農業図絵』を活用させてもらうことにした。理由はそれだけでない。『農業図絵』の翻刻・刊行後、20年余の歳月をへて、欠落していた著者土屋の『農業図之目録』の残余を清水氏が石川県河北郡宇ノ気町内日角（現かほく市内日角）の旧十村役家（現、林廣子家）で発見し、著者土屋の手になる「農業図目録」と解説がほぼ整ったことを確認されたこと、また同時にここに『農業図絵』が確かに土屋の手になる著述（一部にはまだ疑問視する研究者もいると聞く）であり、その成立年代の確定と、著述内容の信憑性が確認されたこと、などにもよる（漁村文化協会発行『農業図絵』第6刷に発見の「農業目録」を掲載）。

第三の理由は、ややこじつけに過ぎるかも知れないが、本学の日本常民文化研究所は次のように北陸との関係があった。すなわち、（財）日本常民文化研究所は1949年以来、戦後の漁業制度改革に伴う漁業制度資料の調査・保存事業を常民文化研究所が水産庁の委託を受けて行ない、そのなかで51年から能登に関わりをもった。だが、その後の事業の中止と解散、調査の全面的中止という、こうした流れをへて神奈川大学に（財）日本常民文化研究所が招致されると、84年から再び、今は亡き網野善彦教授の主導のもと奥能登時国家の借用古文書の返却と調査が再開されたのである。北陸とはこうした歴史的な経緯があり、北陸と（財）日本常民文化研究所とは因縁浅からずの関係にあったのである。『農業図絵』を『絵引』作成の資料に選定した理由にはこの思いも一因でもあったのである。

2 土屋又三郎著『農業図絵』（享保2年）の特徴

さて、先の清水隆久氏の『農業図絵』解題によると、又三郎はすでに元禄15年（1702）には『金城隆盛私記』を、宝永4年（1707）には『耕作私記』5巻を著し、のちの正徳4年（1714）には『加越能大路水経』（『加越能山川記』、ないしは『加越能大路水源記』とも）を著しているという。そうしたなかで、『耕作私記』を著した3ヶ月前には「方言俗言を以てし、いささかも雅言を以て」（『日本農書全集』第4巻 農山漁村文化協会 1980年 6頁）しない文章と、精緻な農具図と農具の名称でよく知られている著名な農書『耕稼春秋』を世に出している。土屋はこの農書で、農具が地元でどのように言われ、年中行事がどのように行われているのかなどを記録することで、農業に対する百姓の理解度を深め、17世紀に入って集約的農業の本

格化しつつある加賀での農業生産量を増大させることを意図したのである（堀尾尚志「解題（2）」『耕稼春秋』「日本農書全集」第4巻 農山漁村文化協会 1980年348頁）。

『農業図絵』はこの『耕稼春秋』の後に著された著作である。『農業図絵』は先述したように加賀の農事暦にもとづく農耕風俗を描いた農書であるが、実は加賀の金沢城下町近郊から城下町、そして石川郡御供田村までの情景、生業なども説明付きの彩色画で精緻に描いている。その意味では、単なる農書というより17世紀末から18世紀はじめにかけての金沢城下や近隣村の常民生活が描かれ、しかも当時の言葉・用語で用具、情景も簡略に説明されているという特徴を持つ。ただ、著者の主題があくまでも農業と農村にあっただけに、城下町の正月情景の描写などは寂しく、簡略化されている憾みがある。とはいえ、東北・北陸諸藩城下町の正月風景とはこのような状況であったのかもしれないとも思われる。さらに、当然ながら、18世紀中ごろわが国に伝えられたという絵画描法の遠近法も、遠近法の伝播以前のこの『農業図絵』には取り入れられていないことにも注意しておきたい。

ところで『近世生活絵引』の作成にあたっては、できるだけ『図絵』が作成された時代の言葉や用語で記録・説明されることに越したことは無い。当然、そのためには文献などの博捜は欠かせず、困難を伴うが、その描かれた用具・道具・衣服などが正確であるかどうか、その名称が果たしてその時代のものかどうかなど、その批判的検討が要請される。とくに、『図絵』が職業的な絵師や画工などによって描かれた場合は、その周りの情景を含めた図絵全体の真実性も検討されなくてはならない。その点、『農業図絵』の作者・土屋は百姓を指導し、自らも指導者として耕作に携わり、実験や実見した経験者であり、時代の証言者でもある。さらに、『農業図絵』の内容に関する清水氏の詳細な考証があり、その内容に関わる堀尾氏の『耕稼春秋』に関する解説も大きな手助けとなる。これまで近世経済史、とりわけ漁業史・商業史・北方史を研究して、農業・農村、都市関係の知見に疎い報告者にとっては力強い援護でもある。

今後の本格的な『近世生活絵引』作成のための試作本作りに、以上の理由から『農業図絵』を選定したが、いま一度、日本常民文化研究所の創立者で、かつ『日本常民生活絵引』の作成者である澁澤敬三氏が作出した「常民」概念と『絵引』の制作意図をここで再確認しておきたい。

まず、常民とは「庶民、衆庶等の語感を避け、貴族、武家、僧侶階層等を除くコモンピープルの意として用い出せるもの。農山漁村のみならず市街地を合せ農工商等一般を含むもの」（「柏葉年譜」『柏葉拾遺』3頁1956年。なお、敬三は1937年に「民具と装飾」〈「アチックマンズリー」No.5〉ですでに「常民」概念を使っている）である。『農業図絵』には興味深い武士や僧侶などの図も描かれているが、今回はこの常民なる語の規定から武士や僧侶などは除外せざるをえなかった。しかし、現在、別途作業を進めている『近世生活絵引』の作成では武士や僧侶も対象に加えることはいうまでもない。

さて『中世常民生活絵引』について、澁澤氏は1940年頃から作成の準備をはじめ、「各絵巻ごとに主題前後の脈絡は考えず、更に一般の景色や、貴族、僧侶、上流の軍人等絵巻の主眼点をば省略し、美術的観点を度外視した、凡そ常民的資料と覚しきものだけを集め、一定数ごとに印刷しこれに（略）番号を付し巻末に近代的名称による分類によって対象物を羅列し当該番号を示した索引をつける構想にほぼ定めた」。そして「民俗学の中でもマテリアルカルチャーの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる」ことを目的とした（『日本常民生活絵引』第1巻 平凡社 1984年 viii～ix）。『日本家族制度と小作制度』の名著をものにし、「有賀社会学」の確立者ともいわれた有賀喜左衛門氏は、澁澤氏のこの試みを「常民文化という一つの自覚による観点から捉えて、日本の基層文化の歴史に照明を当てようとし（略）、〈事〉を具象的に我々の眼に浮かばせようとしたと、端的に説明している（前掲『日本常民生活絵引』第1巻 xi～xii）。こうした澁澤氏の意志を継承できるかどうかは心許ないが、神奈川大学 COE による

『絵引』作成の試みの一端もここにある。

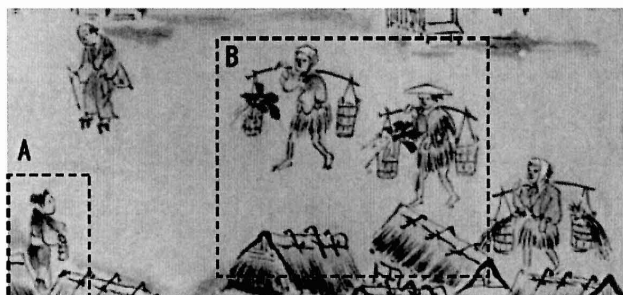
ところで、澁澤氏は『絵巻物による日本常民生活絵引』の凡例分類にしたがって、『図絵』を解説した。その分類とは「一住居 二衣服 三食事 四調度・施設・技術 五資糧取得 六交通・運搬 七交易・交易品 八容姿・動作・労働 九人生・身分・病 一〇死・埋葬 一一児童生活 一二娯楽・遊戯・交際 一三年中行事 一四神仏・祭・信仰 一五動物・植物・自然」である。この分類はあくまでも中世の『図絵』を対象にしたものであり、実際に近世の『図絵』を読み解き分類しようとする、必ずしもこの分類には適当でないもの、該当しないものも出てきた。しかし、強引の謗りを受けかねないが、今回の本報告では一応、基本的にこの分類に従って作業を進めることにした。とはいえ、本報告ではこの分類による提示も未完成であり、『農業図絵』から任意に抽出した場面の『絵引』作成の一端を披露するにすぎないことをお断りしておきたい。

なお、『絵引』作成にあたっては、先にも触れた清水隆久氏の翻刻『農業図絵』（校注・執筆、解題と解題補記。『日本農書全集』第26巻）を底本とし、堀尾尚志氏の『耕稼春秋』の翻刻・解題（『日本農書全集』第4巻）を参考にし、しかも報告者の任意によって常民生活が描かれている場面を対象とした。したがって、本報告では農村や百姓の生業などに必ずしも焦点をあてていないことを付記しておきたい。併せて、『農業図絵』のなかに描かれた女性の世界、北陸農村における女性の立場や役割を幕藩制社会のジェンダーの視点から分析した長島淳子氏の研究（『幕藩制社会のジェンダー構造』校倉書房 2006年）も参考にさせていただいたことを付け加えておく。

3 『絵引』作成の実際的試み

このシンポジウムに提示する試論的『絵引』は以下の数点である。以下、具体的に提示してみたい。

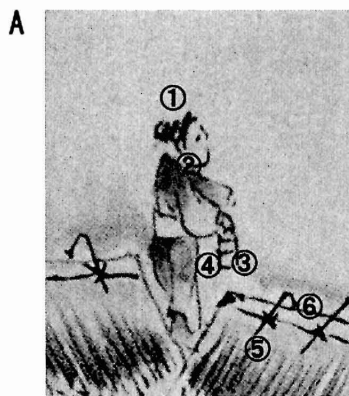
(1) 金沢城下へ下肥貰いに



(清水 2005 P10)

A チロリを持つ女性

- ①島田髷
- ②小袖
- ③チロリ (銚釐)
- ④青色の大前掛け (蔽膝)
- ⑤萱屋根
- ⑥屋根押さえ



正月、百姓が肥料用の下肥を貰いに行く途中の道に、チロリを持った女性がすれ違う様子である。チロリは酒を温める金属性の容器である。酒を買ってきたか、どこかへ届けるのか、はっきりしないが正月の雰囲気が醸し出されている。清水氏はチロリを提灯としている。



B 城下へ下肥貰いに

- ①頬被り ②野良着 ③腰蓑
- ④裸足 ⑤白菅笠 ⑥大枋 (天秤棒)
- ⑦葉付の「いけ大根」 ⑧肥桶

百姓が肥桶に採れた葉付き大根を括りつけて、馴染みの城下の町屋や武家屋敷に下肥を貰いに行く途中である。大根は下肥を貰ったお礼にあげるものであり、のちには下肥代の現物対価となり、現金化された。

(2) 金沢城下に門付けに行く春駒と道行く姉妹

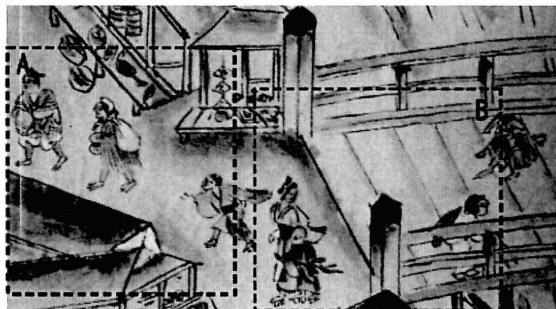


(清水 2005 P12)

- ①板葺き屋根 ②蓑格子
- ③束 ④暖簾名の無い水引暖簾
- ⑤箱屋 ⑥春駒
- ⑦白菅笠 ⑧布肩当て蓑
- ⑨巾布(脚絆) ⑩草鞋
- ⑪島田髷の女 ⑫銀杏髷の少女
- ⑬振袖

島田髷の女性は眉毛があり、未婚女性である可能性があり、姉妹かも知れない。だが、中年の女性でも眉が描かれている場合があり、眉剃りは一般的でなかったようである。

(3) 犀川大橋際の人びと

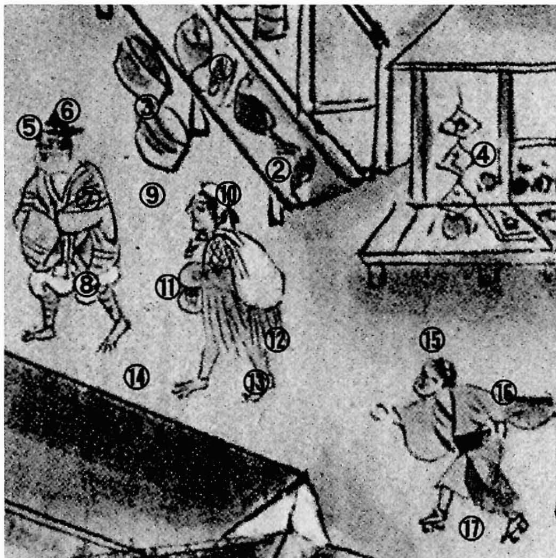


(清水 2005 P15)

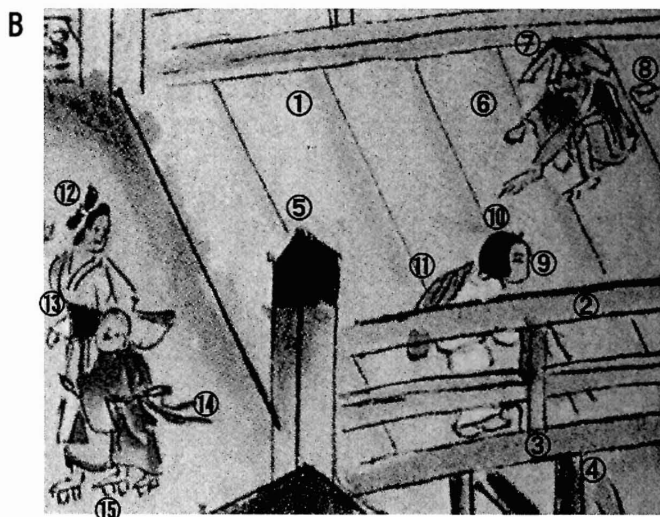
A 犀川大橋際の町屋前

- ①魚屋と魚
- ②床店(出し店。上げ下げできる)
- ③魚入れの曲げ物(丸桶)
- ④葺屋
- ⑤越前万歳師の太夫
- ⑥素襖烏帽子
- ⑦麻の青色素襖
- ⑧素襖小袴
- ⑨太夫の相手をして人を笑わせる供の才藏
- ⑩手拭
- ⑪鼓 ⑫布袋
- ⑬布肩当て蓑
- ⑭太夫と才藏は裸足
- ⑮銀杏髷の少女
- ⑯振袖 ⑰下駄

A



葺屋は犀川に架かる橋の両袂にある。そうであれば、加賀藩では葺屋が城下の橋の管理を兼ねていたのかもしれない。なお、橋の右端に木戸門があり、定刻には閉められた。また、浅野川橋では葺屋は片袂のみである。

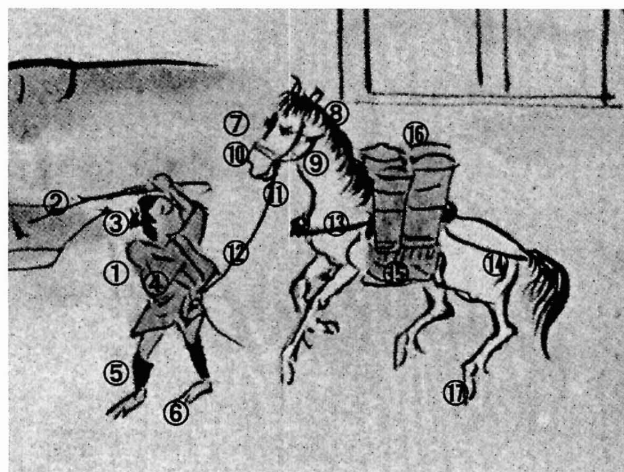


母親は橋を渡る武士団（省略したが、橋の上に描かれている）や盲目の少女に気を取られ、少女は越前万歳師に興味を持ち、母親の手を引き、急かせているのがわかる。正月の親子づれである。

B 犀川大橋上とその際

- ①板橋
- ②欄干
- ③橋桁
- ④橋柱
- ⑤頭巾（兜巾）金物
- ⑥襦袢をまとい、施しを願う乞食
- ⑦破れ菅笠
- ⑧茶碗
- ⑨白装束の盲目の女性
- ⑩下げ髪
- ⑪背負いの編み笠
- ⑫島田髷の女性（眉毛無し）とすがり付く稚児女
- ⑬黒帯
- ⑭付紐の帯
- ⑮ぼっくり下駄

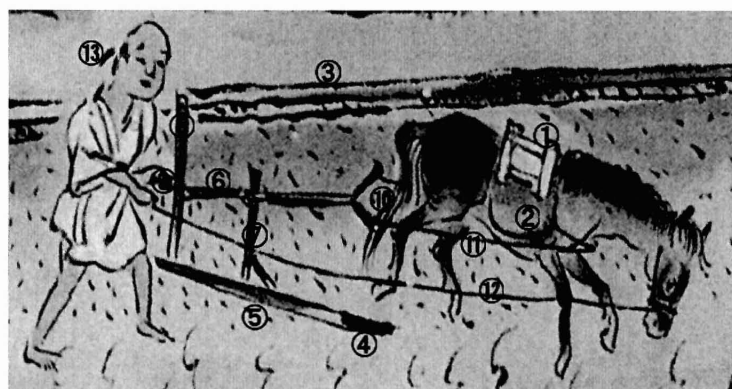
(4) 下肥を運ぶ馬、犁馬耕、刈り草運搬牛



(清水 2005 P34)

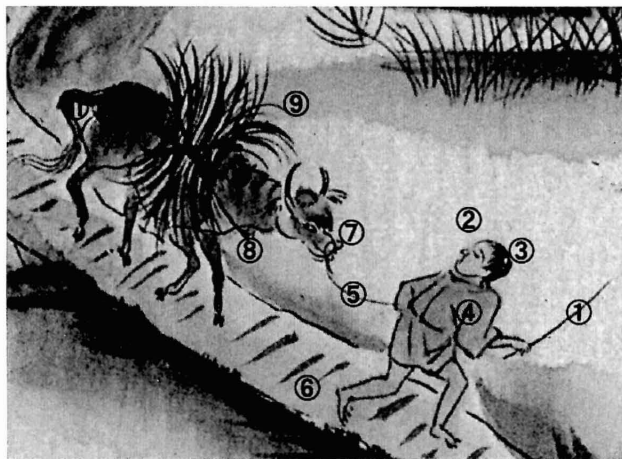
下肥を運ぶ馬と犁馬耕

- ①馬を引く童
- ②鞭 ③丁髷
- ④平袖の木綿腰切り上半衣
(サルコ、あるいは甚平ともいった)
- ⑤脚絆（はばき） ⑥裸足
- ⑦駄馬 ⑧たてがみ
- ⑨面懸 ⑩鼻革
- ⑪轡 ⑫引き綱
- ⑬胸懸 ⑭尻懸
- ⑮下鞍 ⑯4つ負い馬担肥桶
- ⑰蹄



(清水 2005 P58)

- ①鞍 ②下鞍
- ③馬犁（犁鉤がない）
- ④犁先（さき）
- ⑤犁床（すり木）
- ⑥練木（ねり）
- ⑦犁柱（たたり）
- ⑧犁身（いさり木）
- ⑨把手（烏頭）
- ⑩引木（尻かせ）
- ⑪牽綱 ⑫手綱 ⑬丁髷



(清水 2005 P60)

牛による山からの刈草の運搬

- ①鞭 ②牧童
- ③中剃りの元僧（がっそう）髪
- ④木綿腰切り上半衣
- ⑤引綱 ⑥裸足 ⑦鼻括り
- ⑧胸懸 ⑨刈草
- ⑩草押さえ紐
- ⑪尻懸

上から2番目の百姓の野良着、木綿腰切り上半衣をみると、左衽姿である。絵図がどれほど正確に描かれているかを検証することは難しいが、少なくとも城下町の武士や町人などには左衽が見られないことから、土屋又三郎が不用意に描いたとも考えにくい。左衽は野蛮人の表象であるが、野良仕事では着物の衿に気を使っている暇はなく、襟合せなどに無頓着であったのであろう。実際、野良仕事には左衽であっても支障がなかったに違いない。

(5) 稲倉入り後の小祝い

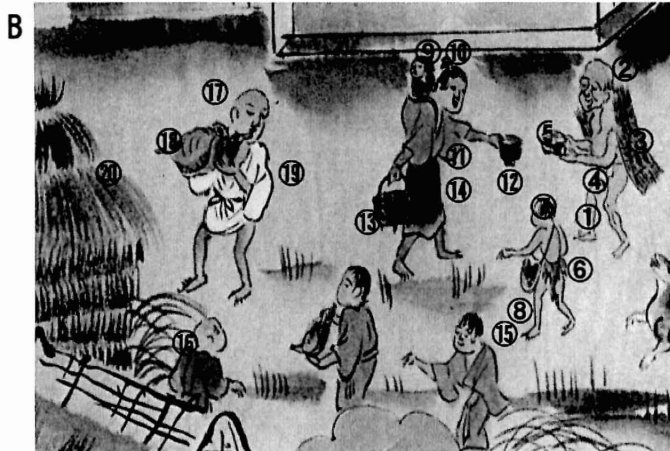


(清水 2005 P159)

A 室内でのくつろぎ

- ①家の破風（煙出し） ②萱屋根
- ③土倉 ④土壁 ⑤庇
- ⑥倉のなかの新稲穂束
- ⑦土間で濁酒や苳を飲む男たち。
胡坐をかいた正面の男は主人か？
- ⑧赤色や鼠色のモジリ
- ⑨酒椀 ⑩苳盆
- ⑪煙管 ⑫苳入れ
- ⑬丸曲げ物（盆） ⑭お萩
- ⑮四角曲げ物（重箱）
- ⑯煮物？ ⑰箸
- ⑱正座してお酌をする姉さん被りの女性。
白筒袖に赤い襷掛けである。
- ⑲青前掛け
- ⑳天狗銚子（湯桶）

百姓たちは稲の倉入れが終ると、ささやかな煮物などをご馳走にして飲酒をし、苳をふかし一服した。くつろぎのひと時である。だが、その時でもご馳走を作り、お酌して廻る主婦たちの労働が続き、軽減されることは少なかった。



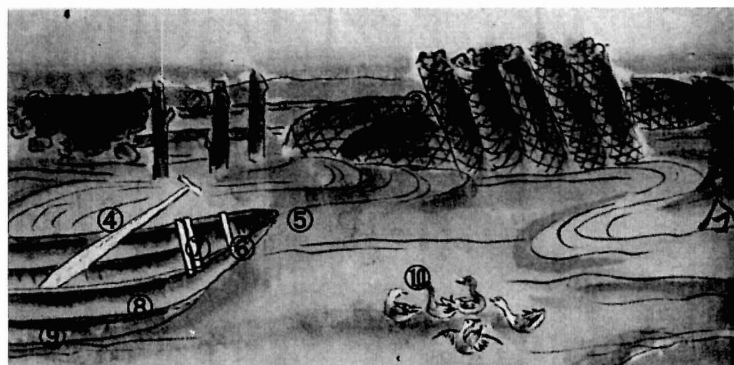
(清水 2005 P159)

「でろれん」祭文は門付けの説教歌祭文（俗謡化した祝詞語りの一種）で、法螺貝を吹き、短い錫杖を鳴らしながら語る。その際、合いの手に「でろれん」と合いの手を入れた。この絵図には錫杖は描かれておらず、坊主頭の「でろれん」祭文が同じく法螺貝を吹く少女を連れ歩いていることから、親子で門付けをして歩いていたに違いない。法螺貝をもつ少女に付き従う少女も百姓の子供と異なる着物を着ており、この二人は姉妹かもしれない。

B 屋外でのくつろぎ

- ①施しを受ける親子連れの乞食
- ②坊主頭 ③薦被り
- ④白禪 ⑤曲げ物椀
- ⑥腰蓑だけの子供
- ⑦放髪 ⑧肩掛け網袋
- ⑨赤子を襟に入れて負ぶった母親
- ⑩ぐる髷
- ⑪元禄袖形式の小袖
- ⑫木椀 ⑬鉄鍋 ⑭前掛け
- ⑮放髪の小袖の少女
- ⑯坊主頭の男児
- ⑰坊主頭の「でろれん」祭文
- ⑱法螺貝 ⑲白半纏
- ⑳稲鶏（いなにお）

(6) 正月 浅野川下流域の漁撈



(清水 2005 P177)



(清水 2005 P176)

- ①犀川下流域の護岸石 ②水柵 ③蛇籠 ④二枚板漁舟 ⑤表 ⑥先舟梁 ⑦梁 ⑧棚（側板）
- ⑨オモキ ⑩鴨の群れ ⑪川漁師 ⑫布肩当て蓑 ⑬小刀か ⑭股引 ⑮青色脚絆
- ⑯藁製投網 ⑰手拭被り ⑱腰蓑

犀川では鰯（ごり）を獲った。1712年の『和漢三才図会』によると、鰯は浅野川に多くおり、ゴリゴリと鳴くという。鰯は鮓にして食べた。投網は藁製であろう。というのも、網の材質が藁から麻に変わるのは漁業先進地瀬戸内海などでも18世紀の中ごろ以降である。

おわりに

『近世生活絵引』を作成する場合、可能な限り対象とする地域における近世期の諸道具・労働着・動作呼称を付けるように心掛け、試みた。しかし、その作業は難しく、満足が行く点に到達していない。というのも、最初から判り切ったことであるが、『絵引』作成には時代史、建築史、文化史、交通史、経済・経営史、民具・民俗学、服飾史、職人史など他の分野のあらゆる英知が結集されなければ『図絵』をなかなか正確に読み解けないということである。あるいは、そうした専門家を集めえないのであれば、計画的・継続的な勉強会を、時間を掛けて行なわなければ『絵引』完成は達成しえないということであろう。

ところで日本は1968年に国民総生産（GNP）が資本主義国家の中で第2位に達し、1970年代初頭以降、高度成長を遂げ、社会は目まぐるしく変わった。86年からは不動産や株式の価格急騰・投機によって、投機が投機を呼ぶバブル景気が起き、90年以降は株価と地価の急落によってバブル崩壊が起きた。

この間に、都市集中型の経済変化に見舞われ、わが国の伝統的な社会生活や社会構造が瓦解していった。この時、同時に文化的効率的な生活志向によって、いともたやすく伝統的な生活様式の破棄、破壊が促され、人びとの都市集中も加速された。こうした動向は当然、伝統的な生産用具・生活用具の捨棄にも繋がっていき、同時にそれを製作してきた職人の仕事を奪い、伝統的技術の廃絶をもたらし、いまでも現在進行形で廃絶に向いつつある技術もある。伝統的な生産用具・生活用具に慣れ親しんできた人びとも少なくなり、その体験を共有できる人びとも確実に減少した。

時代のこうした流れのなかで、そうした用具そのものや使用さえ知らない若者も増えつつある。絵画・写真などの中に描かれ、刻印された民具をはじめとする生産・生活用具、衣類、建物、役畜用家畜などを、こうした時代状況の中で『生活絵引』の形で記録に残しておくことにどれほどの意味があるのか、簡単には答えを見出せないが、少なくとも我々の先祖が土地などに刻み、残してくれた英知、物質文化、生活文化を掘り起こし、記録することはわが国の先祖、強いては人類の文化遺産の継承として大切なことに違いない。我々には先祖の残してくれた英知から学ぶべきことがたくさんあるはずであるからである。

追記：本報告は、清水隆久校注・執筆の『農業図絵』（『日本農書全集』26巻 農山漁村文化協会 1983年）があって、はじめてなしたことである。ここに底本とさせていただいたことに深甚なる感謝を述べたい。また、『農業図絵』をもとに『近世生活絵引』の試作本作成の初歩的試みを行なうに当たって、跡見女子大学の泉 雅博教授、同大学の4年生・平岡諒子、北岡佳奈子、関根梨紗、本学歴史民俗資料科学研究科の土田 拓、伊藤玲子諸氏らの多大なるご協力をえた。記して、感謝申し上げます。

引用文献

- ・清水隆久校注・執筆『農業図絵』（『日本農書全集』26巻）農山漁村文化協会 2005年

参考文献

- ・『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻 平凡社 1984年
- ・堀尾尚志・岡光夫校注・執筆『耕稼春秋』（『日本農書全集』第4巻）農山漁村文化協会 1980年
- ・浅野秀剛・吉田伸之編『大江戸日本橋絵巻「熙代勝覧」の世界』講談社 2003年
- ・『柏葉拾遺』3頁 1956年
- ・澁澤敬三「民具と装飾」『アチックマンズリー』No.5 1937年。この論文で澁澤ははじめて「常民」概念を使っている。

- ・北尾春道編『数奇屋図解事典』彰国社 1959 年
- ・日本建築学会民家語彙収録部会編『日本民家語彙解説辞典』日外アソシエーツ 1993 年
- ・『砺波の民具』砺波郷土資料館 2006 年
- ・佐伯安一『富山民俗の位相』桂書房 2002 年
- ・棚橋正博ほか『江戸のくらし風俗事典』柏書房 2004 年
- ・須藤 功編『写真でみる日本生活図引』全 8 巻 弘文堂 1989 年
- ・「風俗史図録」『新装 江馬務著作集』別巻 中央公論新社 2002 年
- ・坂本太郎監修『風俗辞典』東京堂 1957 年
- ・河鱈実英『日本服飾史辞典』東京堂 1974 年
- ・金沢康隆『江戸服飾史』青蛙房 1982 年
- ・笹間良彦著画『大江戸復元図鑑<庶民編>』遊子館 2003 年